

# KCELS

## Newsletter No. 5 MARCH 1990

### KCELS 第14回大会

泥谷 征人

今回は特別講演の講師として、日本英文学会会長であられ、また日本シェイクスピア協会会長であられる、東京大学の髙橋康也教授をお迎えできたことは、当英文学会にとってこのうえない喜びであり、光栄であった。ご多忙のなか、私たちのささやかな集まりのためにわざわざ起し下さった髙橋教授に改めてお礼申し上げます。またこの大会の準備のために色々ご尽力下さった委員の方々をはじめ、貴重な時間を割いてご協力下さった先生方一人一人に謝意を表したい。

KCELSが今年で14回目の大会を迎えることができたことは喜ばしいことである。しかし、ここで自己満足することは禁物である。よりよい学会にするためには、まだまだ検討を加えるべき課題は残されていることを忘れてはならない。ひとつには、大会の時期や日時、またその運営方法などについて再吟味する時がきている気がしている。これらの件についてお気づきの点があれば、遠慮なくお聞かせ下されれば幸いである。改善すべきところは改善し、名実ともに充実したKCELSに発展させ、正会員、準会員を問わず、みんなが気軽に参加し、知的交流を楽しむことができる学会を目指してゆきたいものである。

これからの学会のあり方のひとつの可能性として、学部学生より積極的な参加の奨励が考えられる。先輩の研究発表や特別講師による講演に接することは、それ自体豊かな体験であるし、英米文学や英語学を学ぶ喜びを実感として感じる、よい機会となるはずである。3年次の学生には、4年次での卒論のてがかりをつかむきっかけが与えられるにちがいない。学会で得たものを大切に、育み、そして将来のKCELSの活動をささえる原動力にしていってくれば、願ってもない喜びである。準会員の期待にそうように努力することも、学会が取り組むべき事柄のひとつだと考える。

今後とも、会員の皆様の変わらぬご支援とご協力を願いたい。



「ネコと文学」

東京大学 髙橋 康也 教授

ネコ、中でも西洋の文学、また広く民族学、伝説、童謡といった文化におけるネコについて考えたい。文学におけるネコには二つのイメージがある。一つは、ヨーロッパで古くから神話的、伝説的にある謎めいた、魔力を持つネコのイメージで、中世のキリスト教的伝統に於ける使い魔としてのネコ、またギリシャ・ローマ神話では魔術の女神ヘカテに仕え、ローマ神話の自由の女神の足元にはべるネコである。ネコは自由で、人間の社会秩序から距離を置き、合理的な理解を拒み、理性に照らされない闇に属するため、恐ろしくもあるが未知の魅力を持つ。このネコのイメージは、エドガー・アラン・ポーの「黒猫」に最もよく表されている。ポーはネコを媒体に人間の精神の揺れ、心の闇の恐ろしさを描いている。また、同時代のフランスの詩人ボードレールも、14行詩「猫」の中で、ポー的な闇のネコを描いている。

二つ目のネコは、ノンセンス・ネコで、前述の怖いネコとも絡んでいるが、別種の系譜に属するネコである。「マザー・グース」の童謡では、ネコがバイオリンを弾いて演出する事により、宇宙的規模のどんちゃん騒ぎが起こる。雌牛が浮かれて月を飛び越し、子犬は大笑い、また無生物であるスプーンやお皿までがその祝祭的な影響を受ける。ここでもネコが理性を越えたひっくりかえしを起こすのだが、ポーの世界と違い、喜ばしい狂気の仕掛け人となっている。

この童謡にも出て来るように、変化する目が月の干満を連想させるからか、ネコは月と深い関係を持つ。エジプトではネコは、月の女神イシスの聖獣として崇拜された。ネコと同様に月も、有用で日常的な太陽と比べて、

無用な時間帯を照らす、非日常的な存在である。また19世紀末には、オスカー・ワイルドの「サロメ」に代表される、禍々しい、狂喜を引き起こす月のイメージが強かった。しかし、童謡においては、月もネコも同様に、その気味の悪さを消し、宇宙的喜びの舞台装置となっている。他のイギリス童謡でも、月は童心と一致調和して、童謡の特権的な幸福な世界をつくり上げている。

さて、ネコはノンセンスの消毒を受けると全く魔力を失ってしまうのだろうか。ネコを動物学的に分類すると豹、虎と同じ種族に属する。これらの猛獣と共通する、暴力性、人を騙し滅ぼす狡知が消える事はない。しかしノンセンスでは、ネコの恐ろしさは表に出ず、悪い事と言っても女王の椅子の下のネズミを驚かす程度のプッシー・キャットとして登場する。ノンセンス・ネコは、言わばウィリアム・ブレイクの描いた楽園にいる、悪魔的な所が無い、いたずらネコである。

19世紀のノンセンス詩の大家エドワード・リアの作品「鼻と小猫」は、ノンセンスの特徴の造語や細かい数字を使った、純粋な恋愛詩のノンセンス化である。月夜に砂浜で恋人達がダンスを踊り続けると言う、自然と動物の調和で詩は終わっているが、やはり童謡と較べて、個と全体とに亀裂が生じた社会に住む近代人特有の孤独を感じさせる。鼻と小猫が得る幸せは、近代的逃避により成り立っているといえる。またリアが、病身のせいもあり一生独身で、フォスというネコを生涯の伴侶として孤独な人生を送った事を考えると、ノンセンスで殺菌され、情緒を出さずに愛の喜びを歌っているが、その背後から悲しみとイノセンスが混じり合って聞こえて来るのだ。ルイス・キャロルはその「不思議の国のアリス」の中で、体が消えた後にニヤニヤ笑いだけ残るチェシャーネコを描いている。このチェシャーネコには、数学者、論理学者であるキャロル独特の、論理的、知的おかしさがある。肉体的、物質性が消されて行くこのプロセスこそ、ノンセンスである。キャロルもまた、ネコより魔術的な所を消し去り、ネコを全くの知的な問題とし、論理的逆説としてのみの存在としている。19世紀後半には、踊り子に代表されるロマンティック・イメージ、肉体と精神の調和が理想とされていた。チェシャーネコや、「アリス」に数多く出て来る首切りのイメージから、キャロルもまた、知性だけ切り離され独走する狂気の世界への恐怖感、固定観念の所有者だったとわかる。一方キャロルは、無意識的な欲望も理解しており、破壊的で欲望、本能を表す豹が、知恵の象徴の鼻を食べてしまう歌を書いている。

二十世紀の詩人、T. S. エリオットは、友人からおとほけ袋ネズミ（ネコ的一种）と呼ばれていたようにネコと関係が深く、詩集「Old Possum's Book of Practical Cats」の最初の詩でネコの名前を取り上げている。彼が

この詩を記したのは、プロテスタントからアングリカンに改宗し、宗教詩の傑作「四つの四重奏」に取り掛かっている間である。ネコの名前の難しさを面白く書いているが、ネコの最後の名前は、ネコをネコたらしめる究極的な、形而上的存在の根拠、つまり人間の理解を越えた信仰の世界に属する名前と言っている。エリオットによると、ネコ本来の謎の部分がキリスト教の世界に滑りこんでいる。初期の「ゲロンチョン」でエリオットは、キリストを恐ろしい虎にたとえ、虎に食い殺されなければ信仰に入れないと書いている。しかし一度信仰に入ると、ネコをノンセンス化して描けるようになって来たのだ。

ネコにはシリアスな闇の部分と、表層的なたわむれの部分がある。ネコを扱った優れたノンセンス作品では、突拍子もないネコが出てくるが、その背後の魔性とのひそかな緊張から、硬直したまじめさでもなく、軽薄な遊びでもない、「真面目な遊び」としてのノンセンスが生まれてくる。

## ■研究発表(要旨)■

### STATE—EVENT—PROPERTY

正木芳子

命題はSTATEもしくはEVENTを表すものと定義付けられ、動詞はその中心となることから概念構造としてSTATEもしくはEVENTを持つものとされる。そうであるならば、形容詞も必ず主語をとり、それとともにSTATEを表す命題を形成するため、概念構造としてはPROPERTYだけではなくSTATEをとるといふべきではないかと思われる。

しかし、形容詞の性質を見ていくと、その現れる位置によって、その概念構造が異なることがわかる。Bolinger(1967), James(1979)が詳しく述べているように、形容詞は名詞の前にある場合と、後にある場合とでは意味が変わってしまう。この違いは、前者がN'を修飾するため、reference - modificationをするのに対し、後者はNPを修飾するため、referent - modificationをするという点に帰着せしめられる。さらにこの2種類の形容詞の違いは、各々の持つ概念構造に反映される。Jackendoff(1983)に従うならば、双方ともIdentificational fieldに属すると思われるが、前者は形容詞が主語の意味を限定しているため、形容詞の表すPROPERTYが文の中心となるthemeとしてTHING TYPEの“instance”となるのに対し、後者は主語であるTHING TOKENがPROPERTYの“instance”となるという違いがあるといえよう。こう考えることによって、今後はBolingerの言うところのcharacterizing/temporalの違いが導きだせる。前者では

PROPERTYがthemeであるためTHING TYPEを特徴付けるようなものでなければならず、かつTHING TYPEを修飾するため、specific stateを要求する一時的なPROPERTYは現れえないことになるからである。

つまり、形容詞は動詞とは異なり、refernce-, referent-modificationという違いがsyntacticにあるために、PROPERTYを含むSTATEとして2種類の概念構造を持ちうる。そのため、形容詞の概念構造としてはPROPERTYのみを考えておき、文全体の概念構造に従ってどちらのSTATEをとるかが決まるとするのが妥当であろうと思われる。

### Richard IIにおける「王」という名前についての一考察

小島裕子

プロットの展開が容易に見えてしまうRichard IIにおいては、Richard王が「王」という名前との係わりの中で自己認識を深めながら成長を遂げる過程そのものが重要である。

劇の前半部では、Richardは自分が「王」であることの意味を考慮しないため、王位保全の名目で、王位の基礎である己の血の否定者・時の継続の妨害者に自らなってしまう。Richardの内的な浅薄さや自己矛盾は、「王」について確固たる認識を持ち、その信念を貫くために行動するNorthumberlandやLancasterらとの対比において強調される。

しかし後半では、状況の悪化に伴って、「王」の名と現実とのギャップを意識的に捉えようとする姿勢がRichardに芽生え、これに呼応して、Richardの言葉は輝きを増す。彼は王位の危機に瀕して、「王」たることを必死に保とうと華麗な言葉を操りながら、「王」であることを、一般論を経て自分自身の問題とする。更に、「王」という名前を奪われる退位の儀式では、自分の全存在までが失われたことを感じ、苦悩と悲嘆のみがリアルなものであることを理解する。Richardが全身全霊を込めた退位のパフォーマンスに、家臣は誰も応えられず沈黙するのみである。彼等はその精神的な硬化、不毛のために平板な人物像と化し、前半とは逆にRichardの内的高揚を浮き立たせている。Richardのかつての曖昧な状態は、むしろBolingbrokeのものとなっている。

Richardは死の直前には、言葉を操って自己認識を深めたことが自らを言葉でflatterしたことになる気付き、言葉からも離れるのだ。彼は暗殺者に対して、初めて行動の人となり、ただ剣を取り、戦い、黙して死す。これは、言葉をもって思想の砦にこもるのも又、欺瞞にすぎないという最終的な認識を体現することに成功した行動

であるといえよう。Richardが、「王」の名も命も捨てて、自らの認識に乗っ取って自らを御し得る高みにまで達した姿に、我々は深い感動を覚えるのである。

### ■ お慶び ■

#### 山口秀夫先生御叙勲

上 紀子

恩師山口秀夫先生の勲三等瑞宝章御受賞の朗報が届いたのは、秋の気配も次第に濃くなり岡田山の木々の梢も色づき始めだした頃でした。1964年の大学院文学研究科設置のため福井大学よりお招きし、定年御退職の1972年迄大学及び大学院で教授として、そしてその後も引き続き1984年迄大学院研究科非常勤講師として英語学、言語学のご指導をして下さいました山口秀夫先生は、英文法、意味論、文体論の御著書も多く、特にウルマンの意味論研究では日本で第一人者でいられます。思いおこせば、神戸女学院に入学して大学生として一步を踏み出した私達が、よく分からないなかにも、広く深い学識から滲み出る“学問の香り”というものを初めて感じたのは山口先生を通してでした。(次のページに続く)



12月2日、ディフォレスト館にて、山口先生御夫妻を囲んで御受賞をお祝いする会を持ちました。英文学科から、高瀬、本城、金城、別府、Broderick、原田諸先生も御出席下さり、大学及び大学院でお教えを受けた者、遠くは静岡、名古屋から、合せて50名余りが懐かしい思い出話に花を咲かせ、なごやかな楽しいひとときを過ごしました。卒業後かなりの歳月が流れ、82才の御高齢の山口先生との再会は、出席者の多くの者にとっては久しぶりのものでしたが、まるで時計の針が一瞬にして逆戻りした如く、当時の授業やゼミでの光景が目の前に戻ってきて、静かな暖かいお人柄の中にみられる厳しい研究者としての山口先生の御存在そのものから、いかに多くの目に見えない大切なものを教えられたかを改めてつくづく感じさせられた一日でした。今なお週に一度教壇に立たれ、日曜日には夙川の教会へ出かけられ、そしてその他の日は研究、依頼原稿の執筆に専念され、生涯をかけて研究に情熱を注いでいらっしゃいます山口先生の御健康を一同心からお祈りして、散会しました。

#### ◎英文学科新任教員紹介

- ・正木 芳子 研究助手 (東京大学大学院文学研究科修士課程修了予定)

### 会 員 消 息

- ・別府恵子氏 *Iconography of the Madonna in the American Novel* 研究
- ・A. Banerjee氏 *Demon Liberated* Macmillan社より出版予定
- ・B. Cooney氏 *Intercultural Contrastive Analysis Project* 研究
- ・林和仁氏 『トマス・ハーディ随想集』(共訳) 株式会社千城より出版。ダブルの研究。“Conrad in Japan” *Conradiana* (Summer1989)
- ・平井雅子氏 *G. Eliot, Foster & Lawrence* 研究
- ・伊藤栄子氏 「チャーサーにおける<非人称>心理述語についての一考察」日本英文学会発表 (青山学院大学)
- ・金城盛紀氏 「シェイクスピア植物誌」月刊『嗟哦』連載
- ・D. Male氏 “Message-Making in the Theatre: An Introduction and Example” 英文学科専門部会発表
- ・高瀬ふみ子氏 *Sixteenth Century Studies Conference* 発表(ミネソタ大学) “Gulliver and *Wasobee*” *Swift Studies* 4
- ・渡部充氏 “Blake as an Artist” 英文学科専門部会発表

#### KCELS Newsletter 編集委員

- ・A. Banerjee・林 和仁・泥谷 征人・高瀬ふみ子

### KCELS Newsletter No. 5

編集発行 神戸女学院大学英文学会

〒662 西宮市岡田山4-1

Tel (0798) 52-0955

振替口座番号 神戸 0-9323